

日本タイ学会 2021 年研究大会共通論題

「2020 年政治対立から考えるタイ社会の変化」

2020 年、タイでは若年層を中心にプラユット内閣退陣や憲法改正、そして王制改革を含む政治改革要求運動が盛り上がった。2021 年も、新型コロナウイルス感染症の再拡大による行動制限を経て、プラユット政権の退陣、刑法 112 条の廃止などを求める抗議活動が継続している。

一連の反政府運動とは何だったのか。今どうなっているのか、今後タイ社会にどのような影響を及ぼしうるのか。タイ研究として、この出来事をどうとらえ、位置づけるのか。

こうした問いを、国家と国民、芸術、中央政治、地方政治といった多角的な視点から考えるため、本セッションでは、タイにおける反政府運動の様相と現状について、異なる分野の 4 名の専門家から話題を提供していただく。会場も交えながら活発な意見交換を行うセッションとしたい。

モデレーター

遠藤 環（埼玉大学経済学部教授）

発表者

1. 櫻田 智恵（日本学術振興会特別研究員 名古屋大学 RPD）
「プーミポンという幻影からの脱却」
2. 清 恵子（作家、キュレーター、メディア・アクティヴィスト）
「2020 年民主化運動におけるアートの役割」
3. 外山 文子（筑波大学人文社会系准教授）
「タイ政治の“悪循環”は終わるのか？」
4. 船津 鶴代（アジア経済研究所新領域研究センター環境・資源研究グループ主任研究員）
「地方自治体選挙と『理念の政治』の影響」

討論者

大泉啓一郎（亜細亜大学アジア研究所教授）

日下 渉（名古屋大学大学院国際開発研究科 准教授）

企画趣旨説明

青木 まき（アジア経済研究所研究員）